

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

## 楠正行通信 第72号

平成30年7月10日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 構成吟 楠正行

企画・構成 四條畷楠正行の会

# 志貫き通し義に生きた なわての誇り楠正行



### 小楠公、登場

島本町の櫻井の駅跡地は国史跡公園第1号。

正成公は、足利尊氏との和睦策、そして後醍醐天皇の比叡山臨幸策を献ずるも、坊門清忠を筆頭とする公家衆に退けられ、「この戦破るべし」と敗戦・討死覚悟で湊川に下る。

京の都を発った正成公は、西国街道を一路西へ西へ進み、ここは桜井の駅。全軍を止めた正成公は、嫡子正行を呼び寄せ、遺訓を残し、ここ桜井の駅から河内東条へ帰した。

「此度の合戦は父、最期の合戦と心得る。今、天下の形勢は後醍醐天皇の政にはあらず、武家の頭領たる足利尊氏にあることは明白。

しかし、天皇への忠節を忘れて尊氏に降参することがあつてはならない。我が一族の一人でも生き残っておれば、金剛山に籠り、時を待ち戦うのだ。これが唯一の孝行と考えよ。」

楠公父子別れの名場面の地となった桜井の駅跡には、裏面にイギリス公使ハリー・パークスの英文が刻まれた楠公訣児之所碑、乃木希典の揮毫となる楠公父子訣別の所碑、「子別れの松のしづくに袖濡れて 昔をしのぶ桜井の里」と詠まれた明治天皇御製碑、台座に近衛文麿の書、「滅私奉公」と刻まれた楠公父子別れの石像等、多くの碑が並ぶ。

《吟》 櫻井訣別 頼山陽

### この母ありて

河内長野の観心寺中院。

老朽化したのか、焼失したのか、その仔細はわからないとのことだが、当時を偲ばせる趣のある建物中院は、再建されてわずか五十数年しかたっていない。そして、正行が自害しようと駆け込んだと伝わる持仏堂は、いまだ再建されていない。

湊川の戦で討死した正成公の首級は、六条河原にさらし首にされた後、尊氏の計らいで丁重に嫡子正行のもとへ届けられた。

5月30日(水)、四條畷楠正行の会では、大阪電気通信大学・正行カルタプロジェクト第2回講義で構成吟『楠正行』を発表した。

脚本・ナレーションは扇谷が担当、演出は真木修と辻總一郎の二人が担当し、吟じた。

### 明治維新150年

平成30年4月24日。

千早赤阪村をおとすれた。

楠氏ゆかりの地として、千早城址・楠城址・赤坂城址、建水分神社、楠公誕生地等多くの史跡が残る。

そして建水分神社の摂社、正成公を祀る南木神社の立派なこと。

また、隣の河内長野には、正成・正行が学んだ観心寺の中院が残る。

観心寺の門前には、今も立派な正成公銅像が建ち、楠氏の菩提寺である中院前には「正成公勉学の地碑」が建つ。

今年は明治維新百五十年。楠公精神がゆえ明治維新が成り、近代日本は始まった。

《吟》 楠公詠史 藤田東湖

観心寺の中院で父の首級と対面し、その変わり果てた父の姿に愕然となった正行は、

「なぜ、ともに湊川に行かなかった。

父の後を追わねば・・・。」

と、持仏堂に一人走り込んだ。

正行の様子がおかしいと思った、母、久子の方は、正行を追って持仏堂に向かう。

《吟》 詠小楠公母 本宮三香

### 楠正行、六時間の激闘

正平3年1月5日、本陣を置いた河内往生院を早朝に発した正行千騎は、高師直率いる四万の大軍相手に、野崎での戦いを皮切りに、この日、巳の刻から申の刻まで、6時間の激闘を戦い続ける。

この日、第2期の衝突は、東高野街道、今の十念寺の建つ西方に布陣した武田伊豆の守千騎との大激戦であったが、死闘を繰り返し、敵七百騎を全滅させる。

しかし、北条神社付近から駆け下った小旗一揆衆に前面を遮断され、背後から佐々木道誉3千に反復攻撃を受け、大塚惟正率いる後陣が総崩れとなり、正行軍の半数近くが討死した。

「貞和年中飯盛山の辺りにして戦死の靈魂永禄年中に至るまで山野に火を立て、夜な夜な相闘泣き声夥し」

と、山本家所蔵本堂再建奉加帳版木に記されている。

飯盛山の辺りでは、四條畷の合戦後200年余りにわたって正行方の戦死者の魂がさまよったことから、その供養として永禄年間に十念寺が建立され、正行の菩提を弔ったとある。

《吟》 十念寺 宮崎東湖

### 四條畷神社創建

明治23年、四條畷神社が創建される。

明治5年、正成公を祀る湊川神社創建に遅れること18年。小楠公自刃の地となった四條畷の民は、住吉平田神社の神主、三牧文吾を中心に、正行を祀る小楠公社創建を熱心に願い出、何度も却下されながら、遂に四條畷神社の社号が下された。

喜んだ四條畷の民らは、境内地や金品を寄進し、老いも若きも土を運び、石を積み上げ、社殿が立派に完成・鎮座した。

そして今、飯盛山から金剛山に連なる山麓の里には、正成、正行ゆかりの史跡が多く残る。

四條畷神社、小楠公墓所、和田賢秀墓、十念寺、往生院六万寺、恩智城址、楠妣庵観音寺、金剛寺、摩尼院、建水分神社、楠公誕生地、観心寺と。

これらの地には、670年を経た今も、日々、この当時と全く同じ夕暮れが訪れている。

《吟》 河内路上 菊池溪琴

### 芳野山に残る正行の足跡

5月12日、大阪電気通信大学木子教室の学生21人は、

吉野山如意輪寺を訪れた。

近鉄南大阪線吉野駅から歩くこと35分。山の木々、そして流れる小川のせせらぎの音は670年前と、果たして変わっているのだろうか。

後醍醐天皇は吉野山行在所吉水院から谷を下り、如意輪寺へと向かったと伝わる道を、今踏みしめながら、後醍醐天皇は自らの足で歩いたのだろうか、それとも駕籠に乘せられて、この急な石段を上ったのだろうか、などと考えている。

門をくぐると、待ち受けていただいた如意輪寺加島住職ご一家の心温まるおもてなしを受け、あまりの喜びとうれしさに感激のあまり、

「今日、ここで泊りたい」

の声が聞こえる。

後醍醐天皇も、如意輪寺を訪れ、如意輪堂に詣り、同じような思いをしたのであろうか。

しかし、後醍醐天皇は多くの学生の訪れを喜んでいるのであろう。

塔尾陵では、扇谷が自作の小楠公を独唱するという誰もが予期しないサプライズに、威儀正しく居並ぶ学生たちは、まるで後醍醐天皇を眼前にしたかのごとく、身動き一つできない静寂のときを共有した。

《吟》 吉野懐古 梁川星巖

### 平和主義者、楠正行

6月9日、私たちは大阪渡辺橋を訪れる。

正平2年11月、山名時氏、細川頼氏の連合軍を迎え撃った正行は、住吉天王寺の戦いに勝利し、敵は一目散に京都を目指して退散した。

この時、敵兵は大川にかかる渡辺橋に殺到して、大川に落ち、厳寒のこの時期、おぼれる兵数百。

「戦いをやめよ。溺れる兵を助けよ！」

溺れる兵を助け、暖を取らせ、傷を手当てし、衣服を与え、武具も与えて京の都に帰したという渡辺橋の美談。これぞ正行の平和主義者たる面目躍如。

この時助けられた敵兵は、後、四條畷の合戦にはせまじ、正行とともに戦い恩を返したとの逸話は、今も歴史に刻まれ、多くの人に語られる。

吉野山如意輪寺に143名の配下とともに訪れ、過去帳にその全員の名を記し、遺髪を奉納し、143名と共に正行の志を31文字の句にあらわして、如意輪堂本堂の板扉に記す。

正統な吉野朝に尽くし、父、正成の遺訓を守り、23歳の短い生涯をここ四條畷の地で終えた正行。

四條畷楠正行の会は、郷土の誇り、楠正行の顕彰に、精一杯努めます。

朗吟で、構成吟、楠正行のフィナーレといたします。

《吟》 楠帯刀之歌 元田永孚

かえらじと かねて思えば 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)